「令和の日本型学校教育」と東書教育賞

代表取締役社長 **渡辺 能理夫**

東京書籍株式会社社長の渡辺でございます。主催者を代表いたしまして、お祝いとご挨拶を申し上げます。

第38回東書教育賞の各賞を受賞された先生方、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

今回も、「東書教育賞」には、全国から130編もの多数のご応募をいただきました。昨年、一昨年に比べるとやや減少していますが、それ以前と比べると同等以上のご応募をいただいており、コロナ禍の大変な状況の下でも授業研究への情熱を失わない全国の先生方のお姿がしのばれ、心から敬意を表します。

昨年を振り返りますと、コロナ禍の下での子どもたちと先生方との苦闘を見事に言い表していたのが、夏の甲子園で優勝した仙台育英高校野球部の須江監督の言葉、「青春って、すごく密なので」だったのではないかと思います。間近で高校生を指導して、栄冠を勝ち得た監督の、勝者だけではない、全国の高校球児を思いやってのエールに、熱い共感が広がりました。

考えてみれば、「密」なのは何も高校球児の青春だけではなく、全ての子どもたちにとっての学校生活そのものが「密」なのではないかと思います。子どもたち同士や先生方との「密」な関わりの中でこそ、「令和の日本型学校教育」が目指す「個別最適な学びと、協働的な学び」が実現されるのではないかと思います。

それが、コロナ禍によって「密」な関わりが大きく制限されてしまう。その中でもなお、学びを止めることなく、いかに充実させていけるか。その苦闘の一端が、130編に及ぶ応募論文に示されているのではないかと考えると、東書教育賞も、長く続けることで新たな意味が加えられることもあるのか、などとも思えてきます。

さて、「令和の日本型学校教育」の構築を訴える中央教育審議会答申は、これまでの「日本型学校教育」が、学習指導のみならず、生徒指導の面でも主要な役割を担い、子どもたちの知・徳・体を一体で育んできたこと、それは諸外国からも高く評価されており、その伝統を大切にした上で、新しい時代に求められる改革を躊躇なく進めて、「令和の日本型学校教育」へと発展させようと提唱しています。

そのために求められるのが「個別最適な学びと、協働的な学び」ですが、このコロナ禍の下で過剰な「密」を避けながら、それをいかに実現するのか。その有力な手段として、まさに今、進められているのが、ICTの活用であろうかと思います。「学びを止めるな」の掛け声に押される形でGIGAスクールの整備が完了し、デジタル教科書の普及も進められました。こうした新しい環境の下で、ICT活用を実のあるものにしていく。その上で大きな礎となるのは、これまで先生方が

築いてこられた授業実践の蓄積ではないのかと考えます。

「令和の日本型学校教育」が、これまでの蓄積を大切にしながら、新しい時代に必要な改革を進めようとしていることと軌を一にして、これまでの授業研究の蓄積を大切にして、ICTの活用を進めていく。そうしたご実践やご研究がつながりながら、ますます進展していくことを願ってやみません。

そのつながっていく営みの一端に、東書教育賞も根付くことができたなら、望外の光栄に存じます。このことを申し添えて、私からのご挨拶といたします。

最後になりましたが、ご多用の折に、最終審査をご担当いただきました審査委員の先生方、一次審査をご担当いただきました東京教育研究所主任研究員の先生方をはじめ、ご協力をいただきました多くの先生方に、この場をお借りいたしまして、厚く御礼申し上げます。

受賞された先生方の、今後ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

この度は、誠におめでとうございます。